

分科会報告

II 「日本の学校と外国の学校」

外国人も市民のひとり

として参加した

吉田武雄

(一)

出席者は、主題にふさわしくアメリカ四人、中国二人、コート・ジボアール一人と三割が外国人。

小林裕子さん(ジャーナリスト)の司会で始まり、品田絹江さん(明訓高校)が、一年間のアメリカ留学体験から見た、日本の高校生活の諸問題について述べました(26頁所載)。

艾曉新さん(第一高校)は、中国で中学まで過ごした学校生活について紹介し、私たちを驚かせました。例えば、高校、

大学の入試は一回きりで浪人は許されず、中学三年生は、朝六時半から午後六時半まで学校で勉強に励むなどです。

ロビン・シモンズさん(専門学校講師)は、アメリカの無学年制の学校で学んだ体験を上手な日本語で話しました。その学校では、校則はみんなで決め、問題が起きたときは、みんなで話し合い、校長も同等で停学などの処分を決めたそうです。日本の学校は、生徒をもっと信用し責任をもたせたらと提言しました。

午後からは、小林昭三さん(新潟大学)が司会をし、キース・ファリスさん(サン・イリノイ・ユニバーシティ新潟校)の英語による報告から始めました。日本の学校についての不安が自身の娘さんの学校とかかわるなかで解消したというものが(32頁所載)。

鈴木美和子さん(西新発田高校)が通訳しましたが、質問にも答えにも時間がかり言葉のかべを実感しました。

家族ぐるみ出席したジュリア・ファリスさん(中条小三年生)の「漢字の読みが難しい」など、流ちょうな日本語によ

る話しぶりは、子どもは語学の天才を思わせるものでした。

コート・ジボアールの留学生、ハビブ・マリクさん(新潟大学農学部)は、指導教官の三沢真一さん(同)の助けをかりて母国の教育事情について述べました。

(二)

初めての試みで、予備知識も不足し、質問も常識的で、討論はかならずしも発展しなかったが、相互の違いや共通点がよく分かり次の第一歩になったと思います。

出席した外国人のみなさんは休憩のわずかの時間にも、互いに話し合い、この集りに参加できたことを喜んでいました。以上の体験をもとに、「日本の学校と外国の学校」分科会を特別にとりだして、主題を明確にし、今後改めて討論してみたいと思います。たとえば、外国では「学校の運営に子ども・父母・地域住民は、どのようにかかわっているか」など。

(県民教育研究所所員)